

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11) 特許出願公開番号

特開2007-131815

(P2007-131815A)

(43) 公開日 平成19年5月31日(2007.5.31)

(51) Int.Cl.	F I	テーマコード (参考)
<b>C09K 11/06 (2006.01)</b>	C09K 11/06 680	3K007
<b>H01L 51/50 (2006.01)</b>	H05B 33/14 B	4J100
<b>C08F 30/04 (2006.01)</b>	C08F 30/04	

審査請求 未請求 請求項の数 9 O L (全 29 頁)

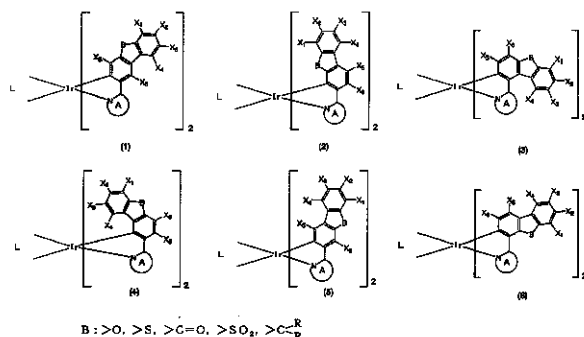
(21) 出願番号	特願2005-328726 (P2005-328726)	(71) 出願人	000002004
(22) 出願日	平成17年11月14日 (2005.11.14)		昭和電工株式会社
			東京都港区芝大門1丁目13番9号
		(74) 代理人	100081994
			弁理士 鈴木 俊一郎
		(74) 代理人	100103218
			弁理士 牧村 浩次
		(74) 代理人	100107043
			弁理士 高畑 ちより
		(74) 代理人	100110917
			弁理士 鈴木 亨
		(72) 発明者	大坪 昭博
			東京都港区芝大門1-13-9 昭和電工株式会社内
		最終頁に続く	

(54) 【発明の名称】 高分子発光材料、有機エレクトロルミネッセンス素子および表示装置

## (57) 【要約】

【課題】高い純度の青色光から赤色光までが高い発光効率で得られる高分子発光材料を提供すること。

【解決手段】本発明に係る高分子発光材料は、下記一般式(1)~(6)のいずれかで表されるイリジウム錯体から導かれる構造単位を含む重合体からなることを特徴とする。



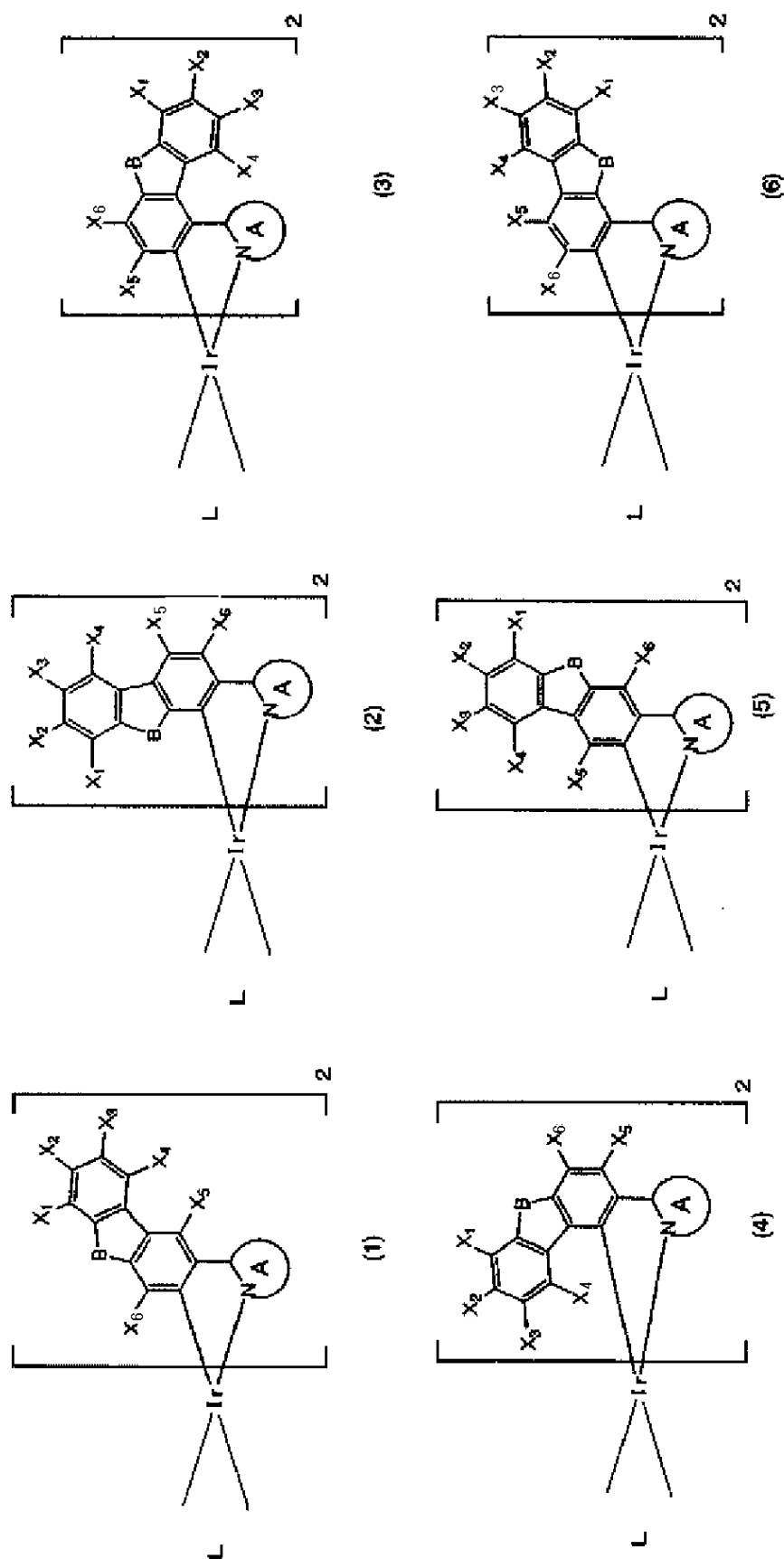
(式中、環Aは窒素原子を含む環状化合物から誘導される2価の置換基であり、該窒素原子はイリジウムに結合している。X<sub>1</sub>~X<sub>6</sub>はそれぞれ独立に -R<sup>1</sup>、-OR<sup>2</sup>、-SR<sup>3</sup>、-OCOR<sup>4</sup>、-COOR<sup>5</sup>、-SiR<sup>6</sup>R<sup>7</sup>R<sup>8</sup>、および-NR<sup>9</sup>R<sup>10</sup>からなる群から選択される置換基であって、Lは、重合性官能基を有する、1価アニオンの2座配位子を表す。)

## 【特許請求の範囲】

## 【請求項 1】

下記一般式（１）～（６）のいずれかで表されるイリジウム錯体から導かれる構造単位を含む重合体からなることを特徴とする高分子発光材料。

【化 1】



10

20

30

40

50

(式中、環 A は窒素原子を含む環状化合物から誘導される 2 価の置換基であり、該窒素原

子はイリジウムに結合している。 $X_1 \sim X_6$ およびRはそれぞれ独立に $-R^1$ 、 $-OR^2$ 、 $-SR^3$ 、 $-OCOR^4$ 、 $-COOR^5$ 、 $-SiR^6R^7R^8$ 、および $-NR^9R^{10}$ （ここで、 $R^1 \sim R^{10}$ は水素原子、ハロゲン原子、シアノ基、ニトロ基、炭素数1～22個の直鎖、環状もしくは分岐アルキル基又はそれらの水素原子の一部もしくは全部がハロゲン原子で置換されたハロゲン置換アルキル基、炭素数6～21個のアリール基、炭素数2～20のヘテロアリール基もしくは炭素数7～21のアラルキル基又はそれらの水素原子の一部もしくは全部がハロゲン原子で置換されたハロゲン置換アリール基、ハロゲン置換ヘテロアリール基もしくはハロゲン置換アラルキル基を表し、 $R^1 \sim R^{10}$ はそれぞれ同一であっても異なっていてよい。）からなる群から選択される置換基であって、また、 $X_1 \sim X_6$ およびRは同一であっても異なっていてよく、環Aは $X_1 \sim X_6$ で定義される基と同様の置換基を有していてもよい。Lは、重合性官能基を有する、1価アニオンの2座配位子を表す。

10

#### 【請求項2】

上記一般式(1)～(6)において、環Aが、ピリジン、キノリン、ベンゾオキサゾール、ベンゾチアゾール、ベンゾイミダゾール、ベンゾトリアゾール、イミダゾール、ピラゾール、オキサゾール、チアゾール、トリアゾール、ベンゾピラゾール、トリアジンおよびイソキノリンからなる群から選ばれる一種から誘導される2価の置換基であり、該置換基が $X_1 \sim X_7$ で定義される基と同様の置換基を有していてもよいことを特徴とする請求項1に記載の高分子発光材料。

#### 【請求項3】

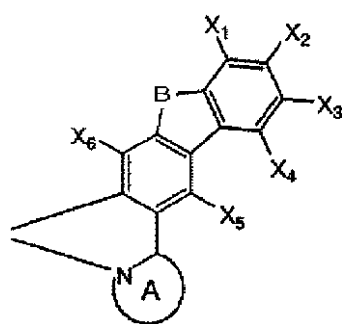
上記一般式(1)～(6)における $X_1 \sim X_6$ 、および、環Aが有する、 $X_1 \sim X_6$ で定義される基と同様の置換基の少なくとも1つが、フッ素原子またはトリフルオロメチル基であることを特徴とする請求項1または2に記載の高分子発光材料。

20

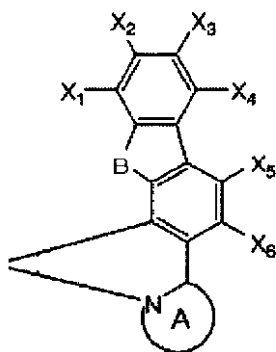
#### 【請求項4】

前記Lが、下記一般式(7)～(12)のいずれかで表される2座配位子であることを特徴とする請求項1～請求項3のいずれかに記載の高分子発光材料。

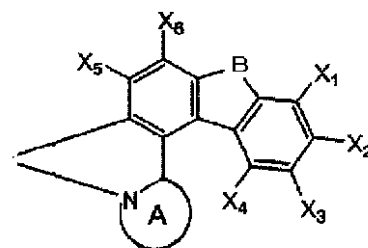
## 【化 2】



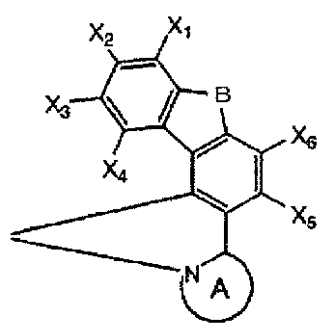
(7)



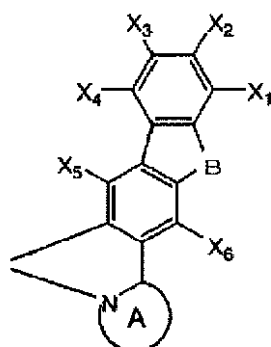
(8)



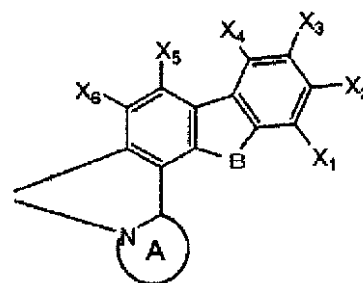
(9)



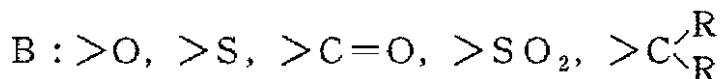
(10)



(11)



(12)

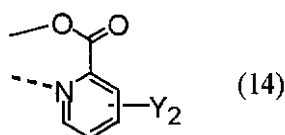
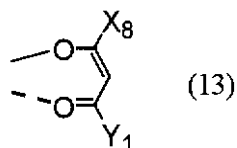


(式中、環 A は窒素原子を含む環状化合物から誘導される 2 価の置換基であり、該窒素原子はイリジウムに結合している。X<sub>1</sub> ~ X<sub>6</sub> および R はそれぞれ独立に -R<sup>1</sup>、-OR<sup>2</sup>、-SR<sup>3</sup>、-OCOR<sup>4</sup>、-COOR<sup>5</sup>、-SiR<sup>6</sup>R<sup>7</sup>R<sup>8</sup>、および -NR<sup>9</sup>R<sup>10</sup> (ここで、R<sup>1</sup> ~ R<sup>10</sup> は水素原子、ハロゲン原子、シアノ基、ニトロ基、炭素数 1 ~ 22 個の直鎖、環状もしくは分岐アルキル基又はそれらの水素原子の一部もしくは全部がハロゲン原子で置換されたハロゲン置換アルキル基、炭素数 6 ~ 21 個のアリール基、炭素数 2 ~ 20 のヘテロアリール基もしくは炭素数 7 ~ 21 のアラルキル基又はそれらの水素原子の一部もしくは全部がハロゲン原子で置換されたハロゲン置換アリール基、ハロゲン置換ヘテロアリール基もしくはハロゲン置換アラルキル基を表し、R<sup>1</sup> ~ R<sup>10</sup> はそれぞれ同一であっても異なってもよい。) からなる群から選択される置換基であって、また、X<sub>1</sub> ~ X<sub>6</sub> および R は同一であっても異なってもよく、環 A は X<sub>1</sub> ~ X<sub>6</sub> で定義される基と同様の置換基を有していてもよい。但し、X<sub>1</sub> ~ X<sub>6</sub>、および環 A が有する置換基のうち少なくとも一つは重合性官能基を有する置換基を表す。)

## 【請求項 5】

前記 L が、下記一般式 (13) または (14) で表される 2 座配位子であることを特徴とする請求項 1 ~ 請求項 3 のいずれかに記載の高分子発光材料。

## 【化 3】



(式中、 $X_8$ は、上記式(1)中の $X_1$ と同義であり、 $Y_1$ および $Y_2$ はそれぞれ独立に、重合性官能基を有する置換基を表す。)

## 【請求項 6】

10

前記重合体が、さらに、ホール輸送性の重合性化合物および電子輸送性の重合性化合物からなる群より選ばれる少なくとも1種の重合性化合物から導かれる構造単位を含むことを特徴とする請求項1～5のいずれかに記載の高分子発光材料。

## 【請求項 7】

陽極と陰極とに挟まれた1層または2層以上の有機高分子層を含む有機エレクトロルミネッセンス素子において、前記有機高分子層の少なくとも1層に、請求項1～6のいずれかに記載の高分子発光材料を含むことを特徴とする有機エレクトロルミネッセンス素子。

## 【請求項 8】

請求項7に記載の有機エレクトロルミネッセンス素子を用いた画像表示装置。

## 【請求項 9】

20

請求項7に記載の有機エレクトロルミネッセンス素子を用いた面発光光源。

## 【発明の詳細な説明】

## 【技術分野】

## 【0001】

本発明は、高分子発光材料および有機エレクトロルミネッセンス素子に関する。より詳しくは、本発明は、高い純度の青色光から赤色光までが高い発光効率で得られる高分子発光材料、および製造工程が簡略化され、大面積化が実現できるとともに、耐久性に優れた有機エレクトロルミネッセンス素子に関する。

## 【背景技術】

## 【0002】

30

近年、有機エレクトロルミネッセンス素子(本明細書において、「有機EL素子」ともいう。)に用いる材料開発が活発に行われている。たとえば、フルカラー表示を実現するためには、光の3原色(RGB)(赤色、緑色および青色)の各単色光を発光する材料が必要であるが、これらに関しては、高い発光効率とともに、高い純度を示す材料が求められている。

## 【0003】

青色光から赤色光までの発光を示す錯体としては、最近、カルバゾール誘導体を有する配位子を有する金属錯体が開示されている。(特許文献1)

しかしながら、該錯体ではいまだ発光効率、寿命などの点で不十分である。さらに、発光層を形成する際に、上記錯体のような低分子化合物では、真空蒸着法が用いられるが、この方法で得られる発光層の膜厚は不均一になりやすい。

40

## 【0004】

同特許文献1には、当該金属錯体を高分子中に分散させたポリマー組成物、すなわちドープ型発光材料も記載されている。当該ポリマー組成物で発光層を形成する場合は塗布法も利用できると記載がある。しかしながら、ドープ型発光材料は熱安定性に劣り、相分離または偏析を起こしやすい。該特許文献1でも該ポリマー組成物を用いた発光層の形成については具体的記載はない。

## 【特許文献1】特開2005-023072号公報

## 【発明の開示】

## 【発明が解決しようとする課題】

50

## 【 0 0 0 5 】

本発明の目的は、高い純度の青色光から赤色光までが高い発光効率で得られる高分子発光材料を提供することにある。また、本発明の別の目的は、製造工程が簡略化され、大面積化が実現できるとともに、耐久性に優れた有機ＥＬ素子および表示装置を提供することにある。

## 【課題を解決するための手段】

## 【 0 0 0 6 】

本発明者らは、上記課題を解決すべく鋭意研究した結果、特定のイリジウム錯体から導かれる構造単位を含む重合体からなる高分子発光材料により、高い純度の青色光から赤色光までが高い発光効率で得られることを見出し、本発明を完成するに至った。

10

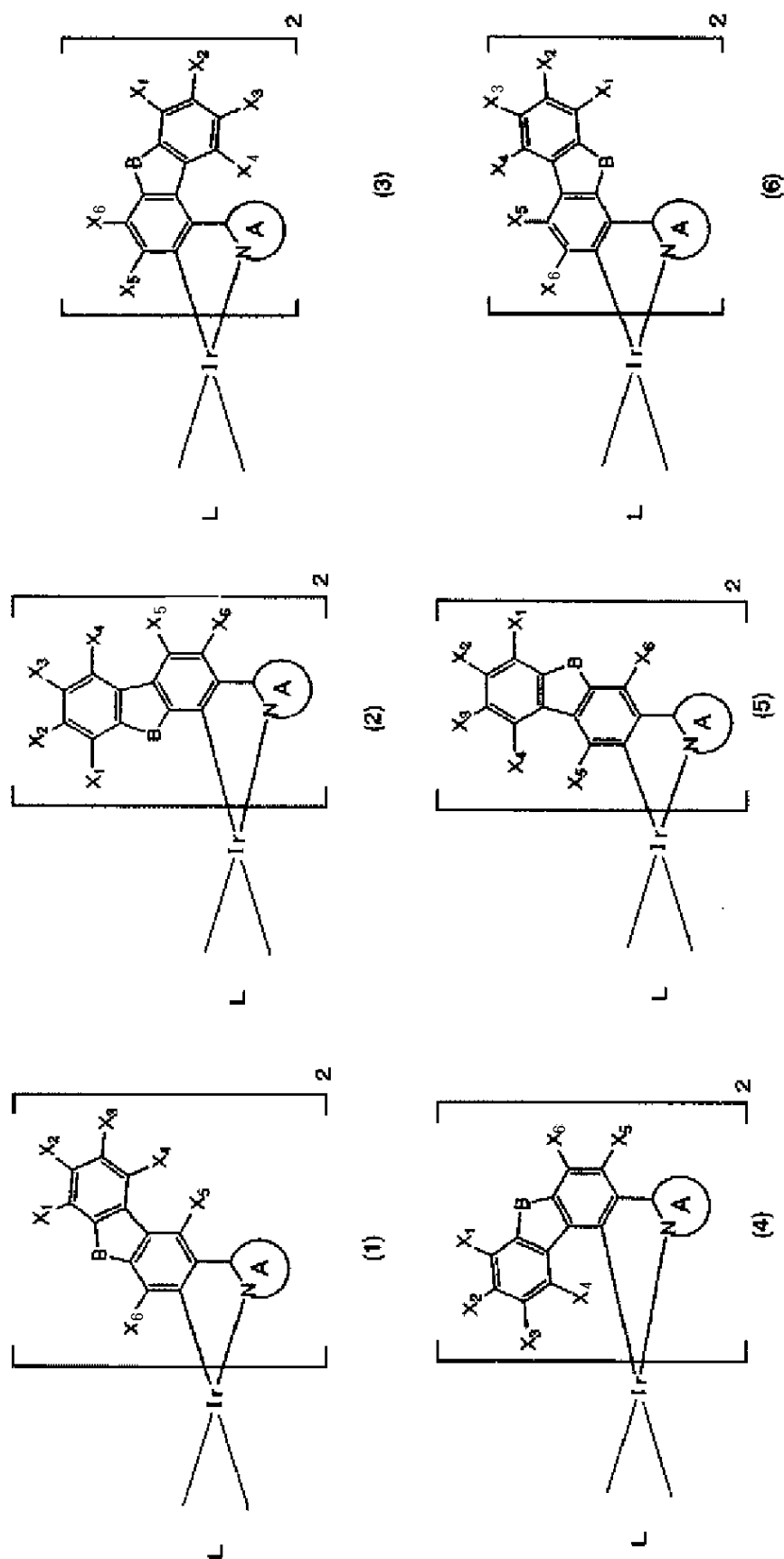
すなわち、本発明は以下のとおりに要約される。

## 【 0 0 0 7 】

[ 1 ] 下記一般式( 1 ) ~ ( 6 ) のいずれかで表されるイリジウム錯体から導かれる構造単位を含む重合体からなることを特徴とする高分子発光材料。

## 【 0 0 0 8 】

【化 1】



10

20

30

40

【 0 0 0 9 】

50



(式中、環 A は窒素原子を含む環状化合物から誘導される 2 価の置換基であり、該窒素原子はイリジウムに結合している。X<sub>1</sub> ~ X<sub>6</sub> および R はそれぞれ独立に - R<sup>1</sup>、- O R<sup>2</sup>、- S R<sup>3</sup>、- O C O R<sup>4</sup>、- C O O R<sup>5</sup>、- S i R<sup>6</sup> R<sup>7</sup> R<sup>8</sup>、および - N R<sup>9</sup> R<sup>10</sup> (ここで、R<sup>1</sup> ~ R<sup>10</sup> は水素原子、ハロゲン原子、シアノ基、ニトロ基、炭素数 1 ~ 22 個の直鎖、環状もしくは分岐アルキル基又はそれらの水素原子の一部もしくは全部がハロゲン原子で置換されたハロゲン置換アルキル基、炭素数 6 ~ 21 個のアリール基、炭素数 2 ~ 20 のヘテロアリール基もしくは炭素数 7 ~ 21 のアラルキル基又はそれらの水素原子の一部もしくは全部がハロゲン原子で置換されたハロゲン置換アリール基、ハロゲン置換ヘテロアリール基もしくはハロゲン置換アラルキル基を表し、R<sup>1</sup> ~ R<sup>10</sup> はそれぞれ同一であっても異なってもよい。) からなる群から選択される置換基であって、また、X<sub>1</sub> ~ X<sub>6</sub> および R は同一であっても異なってもよく、環 A は X<sub>1</sub> ~ X<sub>6</sub> で定義される基と同様の置換基を有していてもよい。L は、重合性官能基を有する、1 価アニオンの 2 座配位子を表す。)

10

# 【0010】

[2] 上記一般式(1) ~ (6)において、環 A が、ピリジン、キノリン、ベンゾオキサゾール、ベンゾチアゾール、ベンゾイミダゾール、ベンゾトリアゾール、イミダゾール、ピラゾール、オキサゾール、チアゾール、トリアゾール、ベンゾピラゾール、トリアジンおよびイソキノリンからなる群から選ばれる一種から誘導される 2 価の置換基であり、該置換基が X<sub>1</sub> ~ X<sub>7</sub> で定義される基と同様の置換基を有していてもよいことを特徴とする上記[1]に記載の高分子発光材料。

20

# 【0011】

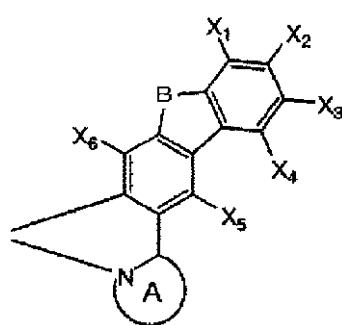
[3] 上記一般式(1) ~ (6)における X<sub>1</sub> ~ X<sub>6</sub>、および、環 A が有する、X<sub>1</sub> ~ X<sub>6</sub> で定義される基と同様の置換基の少なくとも 1 つが、フッ素原子またはトリフルオロメチル基であることを特徴とする上記[1]または[2]に記載の高分子発光材料。

# 【0012】

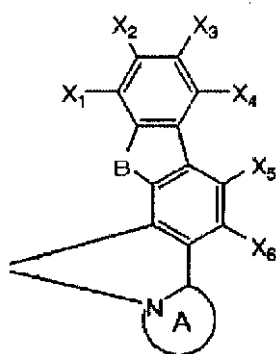
[4] 前記 L が、下記一般式(7) ~ (12)のいずれかで表される 2 座配位子であることを特徴とする上記[1] ~ [3]のいずれかに記載の高分子発光材料。

# 【0013】

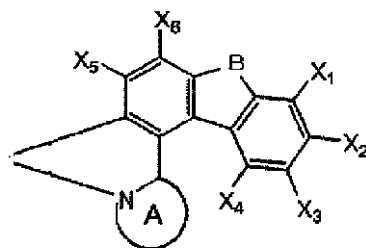
## 【化 2】



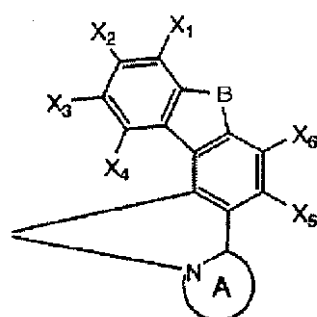
(7)



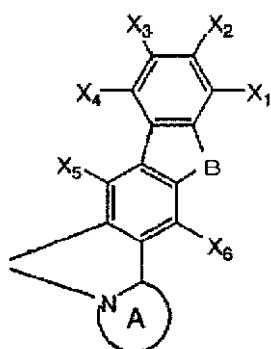
(8)



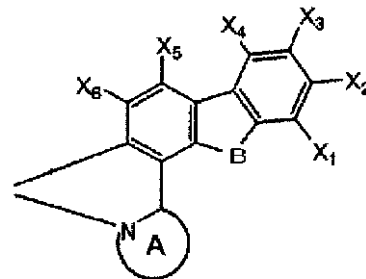
(9)



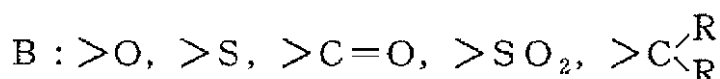
(10)



(11)



(12)



## 【0014】

(式中、環Aは窒素原子を含む環状化合物から誘導される2価の置換基であり、該窒素原子はイリジウムに結合している。X<sub>1</sub>~X<sub>6</sub>およびRはそれぞれ独立に、-R<sup>1</sup>、-OR<sup>2</sup>、-SR<sup>3</sup>、-OCOR<sup>4</sup>、-COOR<sup>5</sup>、-SiR<sup>6</sup>R<sup>7</sup>R<sup>8</sup>、および-NR<sup>9</sup>R<sup>10</sup>(ここで、R<sup>1</sup>~R<sup>10</sup>は水素原子、ハロゲン原子、シアノ基、ニトロ基、炭素数1~22個の直鎖、環状もしくは分岐アルキル基又はそれらの水素原子の一部もしくは全部がハロゲン原子で置換されたハロゲン置換アルキル基、炭素数6~21個のアリール基、炭素数2~20のヘテロアリール基もしくは炭素数7~21のアラルキル基又はそれらの水素原子の一部もしくは全部がハロゲン原子で置換されたハロゲン置換アリール基、ハロゲン置換ヘテロアリール基もしくはハロゲン置換アラルキル基を表し、R<sup>1</sup>~R<sup>10</sup>はそれぞれ同一であっても異なってもよい。)からなる群から選択される置換基であって、また、X<sub>1</sub>~X<sub>6</sub>およびRは同一であっても異なってもよく、環AはX<sub>1</sub>~X<sub>6</sub>で定義される基と同様の置換基を有していてもよい。但し、X<sub>1</sub>~X<sub>6</sub>、および環Aが有する置換基のうち少なくとも一つは重合性官能基を有する置換基を表す。)

## 【0015】

[5] 前記[1]が、下記一般式(13)または(14)で表される2座配位子であることを特徴とする上記[1]~[3]のいずれかに記載の高分子発光材料。

## 【0016】

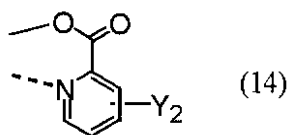
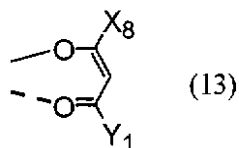
10

20

30

40

## 【化 3】



## 【 0 0 1 7 】

(式中、 $X_8$ は、上記式(1)中の $X_1$ と同義であり、 $Y_1$ および $Y_2$ はそれぞれ独立に、重合性官能基を有する置換基を表す。)

10

## 【 0 0 1 8 】

[6] 前記重合体が、さらに、ホール輸送性の重合性化合物および電子輸送性の重合性化合物からなる群より選ばれる少なくとも1種の重合性化合物から導かれる構造単位を含むことを特徴とする上記[1]～[5]のいずれかに記載の高分子発光材料。

## 【 0 0 1 9 】

[7] 陽極と陰極とに挟まれた1層または2層以上の有機高分子層を含む有機エレクトロルミネッセンス素子において、前記有機高分子層の少なくとも1層に、上記[1]～[6]のいずれかに記載の高分子発光材料を含むことを特徴とする有機エレクトロルミネッセンス素子。

## 【 0 0 2 0 】

20

[8] 上記[7]に記載の有機エレクトロルミネッセンス素子を用いた画像表示装置。

## 【 0 0 2 1 】

[9] 上記[7]に記載の有機エレクトロルミネッセンス素子を用いた面発光光源。

## 【発明の効果】

## 【 0 0 2 2 】

本発明によれば、高い純度の青色光から赤色光までの発光が高い発光効率で得られる高分子発光材料を提供することができる。中でも、発光色の短波長化、長寿命化に有効である。また、本発明によれば、製造工程が簡略化され、大面積化が実現できるとともに、耐久性に優れた有機EL素子および表示装置を提供することができる。

## 【発明を実施するための最良の形態】

30

## 【 0 0 2 3 】

有機EL素子において、青色から赤色に至るりん光発光を得るためには、最低励起状態のエネルギーレベルを変えることが重要である。また、一般に励起三重項状態の寿命が励起一重項の寿命に比べて長く、分子が高エネルギー状態に長く留まるため、周辺物質との反応、分子自体の構造変化、励起子同士の反応などが起こるため、これまでの金属配位化合物ではりん光発光素子の駆動寿命が短かったのではないかと考えられる。

## 【 0 0 2 4 】

そこで、本発明者らは種々の検討を行い、上記式(1)～(6)の何れかで表されるイリジウム錯体から導かれる構造単位を含む重合体からなることを特徴とする高分子発光材料が有効であることを見出した。

40

## 【 0 0 2 5 】

以下、本発明について具体的に説明する。

本発明に係る高分子発光材料は、特定のイリジウム錯体から導かれる構造単位を含む重合体からなる。このような材料では、イリジウム錯体の三重項励起状態からの発光が得られる。上記高分子発光材料は、さらに、ホール輸送性の重合性化合物および電子輸送性の重合性化合物からなる群から選択される少なくとも1種の重合性化合物から導かれる構造単位を含む重合体からなることが好ましい。

## 【 0 0 2 6 】

<イリジウム錯体から導かれる構造単位を含む重合体>

本発明に用いられる重合体は、上記式(1)～(6)のいずれかで表されるイリジウム

50

錯体を含む単量体を重合して得られる。上記重合体において、上記イリジウム錯体の単量体は、1種単独で、または2種以上を組み合わせて用いてもよい。本明細書において、上記重合体には、上記錯体の単独重合体、および2種以上の該錯体の共重合体も含む。

#### 【0027】

上記式(1)~(6)で表されるイリジウム錯体から導かれる構造単位を含む重合体からなることを特徴とする高分子発光材料は、特定のカルバゾール構造を有する配位子が配位している。そのため、該錯体から導かれる高分子発光材料は青色光から赤色光までを発光する。また、この高分子発光材料によれば、優れた耐久性を有する有機EL素子を製造できる。

#### 【0028】

上記式(1)~(6)において、 $X_1 \sim X_6$ およびRはそれぞれ独立に $-R^1$ 、 $-OR^2$ 、 $-SR^3$ 、 $-OCOR^4$ 、 $-COOR^5$ 、 $-SiR^6R^7R^8$ 、および $-NR^9R^{10}$ (ここで、 $R^1 \sim R^{10}$ は水素原子、ハロゲン原子、シアノ基、ニトロ基、炭素数1~22個の直鎖、環状もしくは分岐アルキル基又はそれらの水素原子の一部もしくは全部がハロゲン原子で置換されたハロゲン置換アルキル基、炭素数6~21個のアリール基、炭素数2~20のヘテロアリール基もしくは炭素数7~21のアラルキル基又はそれらの水素原子の一部もしくは全部がハロゲン原子で置換されたハロゲン置換アリール基、ハロゲン置換ヘテロアリール基もしくはハロゲン置換アラルキル基を表し、 $R^1 \sim R^{10}$ はそれぞれ同一であっても異なってもよい。)からなる群から選択される置換基であって、また、 $X_1 \sim X_6$ およびRは同一であっても異なってもよい。環Aは $X_1 \sim X_6$ で定義される基と同様の置換基を有していてもよい。

#### 【0029】

ここで、 $R^1 \sim R^{10}$ は置換基を有していてもよく、置換基の例として、ハロゲン原子、シアノ基、アルデヒド基、アミノ基、アルキル基、アルコキシ基、アルキルチオ基、カルボキシ基、スルホン酸基、ニトロ基等を挙げることができる。これらの置換基は、さらにハロゲン原子、メチル基等によって置換されていてもよい。

以下に $X_1 \sim X_6$ で表される置換基の例を示すが、本発明においては、以下に限定されるものではない。

#### 【0030】

$-R^1$ の例としては、水素原子、フッ素原子、塩素原子、臭素原子、ヨウ素原子等のハロゲン原子、シアノ基、ニトロ基、メチル基、エチル基、プロピル基、イソプロピル基、シクロプロピル基、ブチル基、イソブチル基、tert-ブチル基、シクロブチル基、ペンチル基、イソペンチル基、ネオペンチル基、シクロペンチル基、ヘキシル基、シクロヘキシル基、ヘプチル基、シクロヘプチル基、オクチル基、ノニル基、デシル基、フェニル基、トリル基、キシリル基、メシチル基、クメニル基、ベンジル基、フェネチル基、メチルベンジル基、ジフェニルメチル基、スチリル基、シンナミル基、ビフェニル残基、ターフェニル残基、ナフチル基、アントリル基、フルオレニル基、フラン残基、チオフエン残基、ピロール残基、オキサゾール残基、チアゾール残基、イミダゾール残基、ピリジン残基、ピリミジン残基、ピラジン残基、トリアジン残基、キノリン残基、キノキサリン残基またはこれらがフッ素原子、塩素原子、臭素原子、ヨウ素原子等で置換されたハロゲン置換体を挙げることができる。 $-OR^2$ の例としては、水酸基、メトキシ基、エトキシ基、プロポキシ基、ブトキシ基、tert-ブトキシ基、オクチルオキシ基、tert-オクチルオキシ基、フェノキシ基、4-tert-ブチルフェノキシ基、1-ナフチルオキシ基、2-ナフチルオキシ基、9-アンスリルオキシ基を挙げることができる。 $-SR^3$ の例としては、メルカプト基、メチルチオ基、エチルチオ基、tert-ブチルチオ基、ヘキシルチオ基、オクチルチオ基、フェニルチオ基、2-メチルフェニルチオ基、4-tert-ブチルフェニルチオ基を挙げることができる。 $-OCOR^4$ の例としては、ホルミルオキシ基、アセトキシ基、ベンゾイルオキシ基を挙げることができる。 $-COOR^5$ の例としては、カルボキシ基、メトキシカルボニル基、エトキシカルボニル基、tert-ブトキシカルボニル基、フェノキシカルボニル基、ナフチルオキシカルボニル基等を挙

10

20

30

40

50

げることができる。- SiR<sup>6</sup>R<sup>7</sup>R<sup>8</sup>の例としては、シリル基、トリメチルシリル基、トリエチルシリル基、トリフェニルシリル基等を挙げることができる。- NR<sup>9</sup>R<sup>10</sup>の例としては、アミノ基、N - メチルアミノ基、N - エチルアミノ基、N , N - ジメチルアミノ基、N , N - ジエチルアミノ基、N , N - ジイソプロピルアミノ基、N , N - ジブチルアミノ基、N - ベンジルアミノ基、N , N - ジベンジルアミノ基、N - フェニルアミノ基、N , N - ジフェニルアミノ基等を挙げることができる。

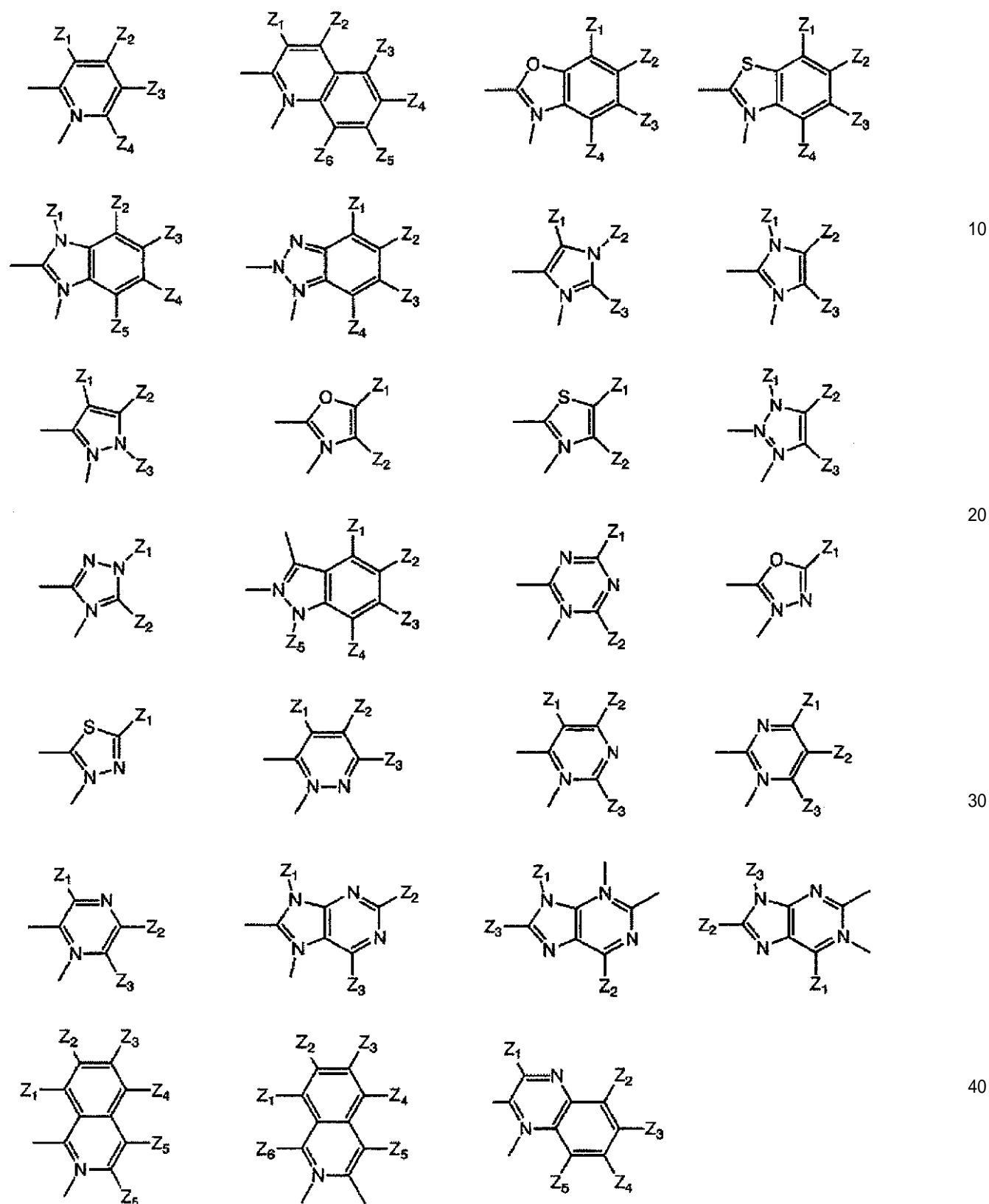
【 0 0 3 1 】

上記式(1)～(6)で示されるイリジウム錯体のうち、環Aが、以下に示す構造を有する環状化合物のいずれかから誘導される2価の置換基であることが好ましい。環Aが、ピリジン、キノリン、ベンゾオキサゾール、ベンゾチアゾール、ベンゾイミダゾール、ベンゾトリアゾール、イミダゾール、ピラゾール、オキサゾール、チアゾール、トリアゾール、ベンゾピラゾールまたはトリアジンから誘導される2価の置換基(該置換基が、X<sub>1</sub>～X<sub>7</sub>(以下、まとめて「置換基X<sub>n</sub>」とも表記する。)で定義される基と同様の置換基を有していてもよい。)であることが好ましく、ピリジン、キノリンから誘導される2価の置換基(該置換基が、X<sub>n</sub>で定義される基と同様の置換基を有していてもよい。)であることがより好ましい。

10

【 0 0 3 2 】

## 【化 4】



## 【 0 0 3 3 】

(ここで、Z<sub>1</sub> ~ Z<sub>6</sub>は水素原子、ハロゲン原子、シアノ基、ニトロ基、炭素数1 ~ 22個の直鎖、環状もしくは分岐アルキル基又はそれらの水素原子の一部もしくは全部がハロゲン原子で置換されたハロゲン置換アルキル基、炭素数6 ~ 21個のアリール基、炭素数2 ~ 20のヘテロアリール基もしくは炭素数7 ~ 21のアラルキル基又はそれらの水素原子

の一部もしくは全部がハロゲン原子で置換されたハロゲン置換アリール基、ハロゲン置換ヘテロアリール基もしくはハロゲン置換アルキル基であり、また、 $Z_1 \sim Z_6$ は同一であっても異なっても良い。）

#### 【0034】

上記式(1)～(6)で示されるイリジウム錯体において、置換基 $X_n$ 、および、環Aが有する、 $X_n$ で定義される基と同様の置換基の少なくとも1つが、青色の発光色が得られるという観点から、ハロゲン原子、シアノ基またはハロゲン置換アルキル基であることが好ましく、フッ素原子、塩素原子、シアノ基またはトリフルオロメチル基であることがより好ましく、フッ素原子またはトリフルオロメチル基であることがさらに好ましく、フッ素原子であることが最も好ましい。また、青色から赤色までの発光色の制御が容易であるという観点から、 $-R$ 、 $-OR$ または $-SR$ であることが好ましい。置換基 $X_n$ 、および、環Aが有する、 $X_n$ で定義される基と同様の置換基の少なくとも1つが、上記いずれかの置換基を有する場合、他の $X_n$ は水素原子であることが多いが、さらに他の置換基であってもよい。

10

#### 【0035】

上記式(1)～(6)で示されるイリジウム錯体中、合成が容易であるという観点から、上記式(2)、(5)で示される金属配位化合物が好ましい。

上記式(1)～(6)で示されるイリジウム錯体中、Bは、青色の発光色が得られるという観点からは $>C=O$ または $>SO_2$ であることが好ましく、また、緑色から赤色までの発光波長が得られるという観点からは $>O$ 、 $>S$ または $>CR_2$ であることが好ましい。

20

#### 【0036】

上記式(1)～(6)で示されるイリジウム錯体は置換基を様々に変えることにより、最低励起状態のエネルギーレベルが変化し、青色から赤色発光を有する有機ELの発光材料として適している。

#### 【0037】

上記式(1)～(6)において、Lは、重合性官能基を有する、1価アニオンの2座配位子を表す。

1価アニオンの2座配位子としては、例えば、水素イオンが1つ脱離して、2つの配位座を含む共役構造が、全体として1価アニオン性となり得る構造を有する化合物から、水素イオンが1つ脱離し、1価のアニオンとなった化合物；または、分子内にピリジン環、カルボニル基、イミン基等の非イオン性の配位座と、水酸基、カルボキシ基等の水素イオンが1つ脱離して1価のアニオン性配位座になり得る部位とを有する化合物などが挙げられる。

30

#### 【0038】

なお、上記配位子は、重合性官能基を有する置換基以外にも、他の置換基を有していてもよく、該置換基としては、特に制限されず、例えば、 $X_1$ で定義される基と同様の置換基が挙げられる。

#### 【0039】

Lは、重合性官能基を有するが、該官能基は、ラジカル重合性、カチオン重合性、アニオン重合性、付加重合性、および縮合重合性の官能基のいずれであってもよい。これらのうちで、ラジカル重合性の官能基は、重合体の製造が容易であるため好ましい。

40

#### 【0040】

上記重合性官能基としては、例えば、アリール基、アルケニル基、アクリレート基、メタクリレート基、メタクリロイルオキシエチルカルバメート基等のウレタン(メタ)アクリレート基、ビニルアミド基およびこれらの誘導体などを挙げることができる。これらのうちで、アルケニル基が好ましい。

#### 【0041】

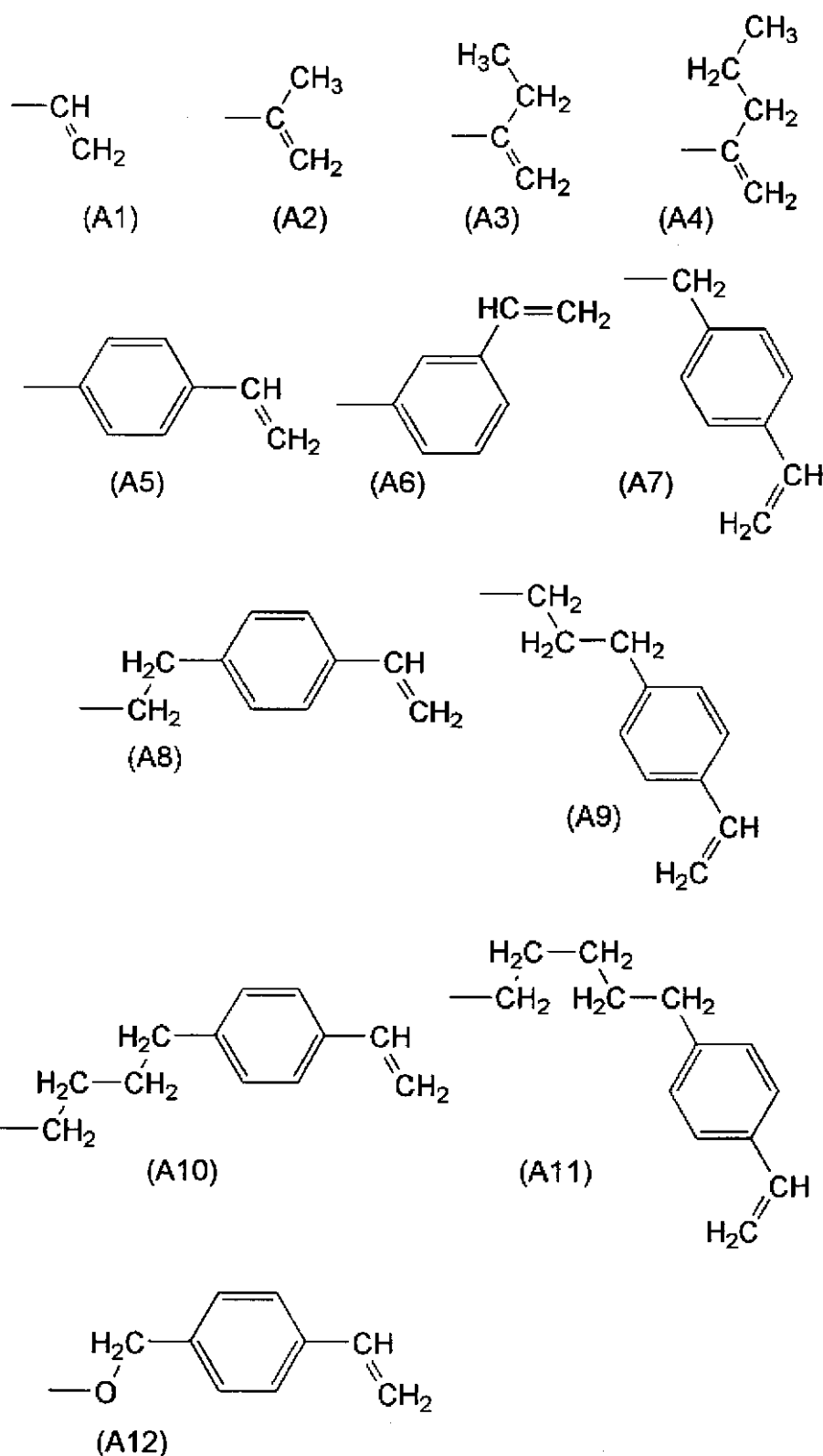
Lは、具体的には、上記官能基を、下記一般式(A1)～(A12)で表される置換基として有することがより好ましい。これらのうちで、下記式(A1)、(A5)、(A8

50

)、(A12)で表される置換基は、イリジウム錯体に官能基が容易に導入できるためさらに好ましい。

【0042】

【化5】



10

20

30

40

50

【0043】

また、Lとしては、上記式(7)～(14)のいずれかで表される2座配位子が好ましい。また、より高い発光効率を有し、より長寿命の高分子発光材料が得られるため、上記



式(7)～(12)で表される2座配位子がより好ましい。

【0044】

上記式(7)～(12)において、 $X_1 \sim X_6$ 、R、Bおよび環Aはそれぞれ上記式(1)中の $X_1 \sim X_6$ 、R、Bおよび環Aと同義であるが、 $X_1 \sim X_6$ および環Aが有する置換基のうち少なくとも一つは重合性官能基を有する置換基である。

【0045】

また、上記式(13)または(14)においては、 $X_8$ は、上記式(1)中の $X_1$ と同義であり、 $Y_1$ および $Y_2$ はそれぞれ独立に、重合性官能基を有する置換基である。

上記式(7)～(14)での重合性官能基を有する置換基としては、重合性官能基を有することのほか、特に制限されず、 $X_1$ で定義される基と同様の置換基などが挙げられる。

10

【0046】

上記重合性官能基としては、上記式(1)～(6)中のLにおける重合性官能基と同義であり、好ましい範囲も同じである。具体的には、それぞれ上記式(A1)～(A12)で表される置換基であることがより好ましい。これらのうちで、それぞれ上記式(A1)、(A5)、(A8)、(A12)で表される置換基であることは、イリジウム錯体に官能基が容易に導入できるためさらに好ましい。

【0047】

上記式(1)で表されるイリジウム錯体は、例えば、以下のように製造することができる。まず、カルバゾール構造を有する配位子と、塩化イリジウムなどのイリジウム化合物(0.5当量)とを、2-エトキシエタノールなどの溶媒中で反応させる。次いで、得られた金属錯体および重合性官能基を有する2座配位子を、炭酸ナトリウムと共に、2-エトキシエタノールなどの溶媒中で加熱した後、精製して、上記式(1)で表されるイリジウム錯体を得る。なお、重合性官能基を有する2座配位子は、公知の方法によって得られる。

20

【0048】

また、上記重合体の重量平均分子量は、1,000～2,000,000であることが好ましく、5,000～1,000,000であることがより好ましい。本明細書における分子量は、GPC(ゲルパーミエーションクロマトグラフィー)法を用いて測定されるポリスチレン換算分子量をいう。上記分子量がこの範囲にあると、重合体が有機溶媒に可

30

【0049】

上記重合体は、ランダム共重合体、ブロック共重合体、および交互共重合体のいずれでもよい。

上記重合体の重合方法は、ラジカル重合、カチオン重合、アニオン重合、および付加重合のいずれでもよいが、ラジカル重合が好ましい。

【0050】

<キャリア輸送性の重合性化合物から導かれる構造単位を有する重合体>

本発明に用いられる重合体は、1種または2種以上の上記イリジウム錯体の単量体と共に、ホール輸送性の重合性化合物および電子輸送性の重合性化合物からなる群より選択される少なくとも1種の重合性化合物を含む単量体を共重合して得られる重合体であることが好ましい。なお、本明細書において、ホール輸送性の重合性化合物および電子輸送性の重合性化合物を併せて、キャリア輸送性の重合性化合物ともいう。

40

【0051】

すなわち、上記高分子発光材料は、1種または2種以上の上記イリジウム錯体から導かれる構造単位と共に、1種または2種以上の上記ホール輸送性の重合性化合物から導かれる構造単位、または1種または2種以上の電子輸送性の重合性化合物から導かれる構造単位を含む重合体からなることが好ましい。このような高分子発光材料では、上記イリジウム錯体から導かれる構造単位上で、ホールと電子とが効率よく再結合するため、高い発光効率を得られる。

50

## 【 0 0 5 2 】

また、上記高分子発光材料は、1種または2種以上の上記イリジウム錯体から導かれる構造単位と共に、1種または2種以上のホール輸送性の重合性化合物から導かれる構造単位と、1種または2種以上の電子輸送性の重合性化合物から導かれる構造単位とを含む重合体からなることがより好ましい。このような高分子発光材料は、発光性、ホール輸送性および電子輸送性のすべての機能を備えているため、イリジウム錯体上で、ホールと電子とがさらに効率よく再結合するため、より高い発光効率が得られる。

## 【 0 0 5 3 】

上記ホール輸送性の重合性化合物および上記電子輸送性の重合性化合物は、重合性官能基を有することのほか、特に制限されず、公知のキャリア輸送性の化合物が用いられる。

上記重合性官能基は、ラジカル重合性、カチオン重合性、アニオン重合性、付加重合性、および縮合重合性の官能基のいずれであってもよい。これらのうちで、ラジカル重合性の官能基は、重合体の製造が容易であるため好ましい。

## 【 0 0 5 4 】

上記重合性官能基としては、上記式(1)～(6)中のLにおける、重合性官能基と同義であり、好ましい範囲も同じである。

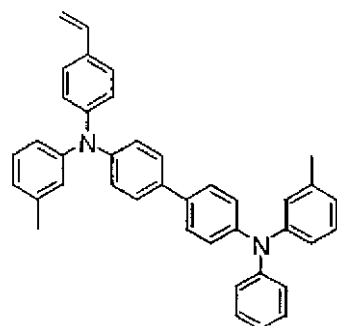
上記重合性化合物は、具体的には、上記官能基を、上記式(A1)～(A12)で表される置換基として有することがより好ましい。

## 【 0 0 5 5 】

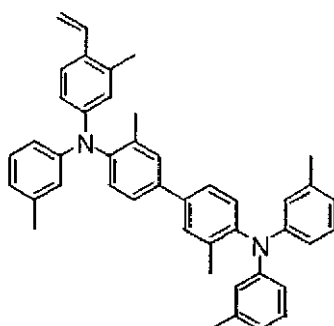
上記ホール輸送性の重合性化合物としては、具体的には、下記一般式(E1)～(E6)で表される化合物が好ましく、共重合体におけるキャリア移動度が高いため、下記式(E1)～(E3)で表される化合物がより好ましい。

## 【 0 0 5 6 】

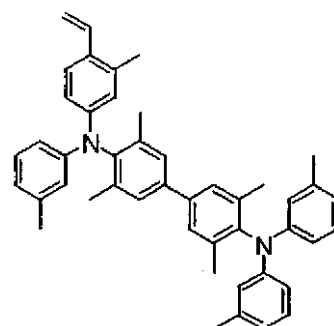
## 【 化 6 】



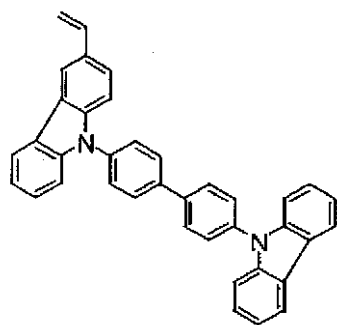
(E1)



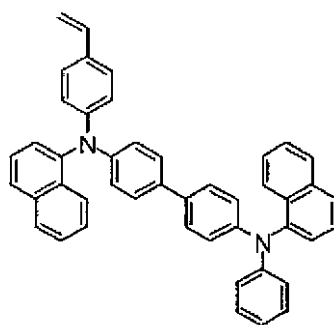
(E2)



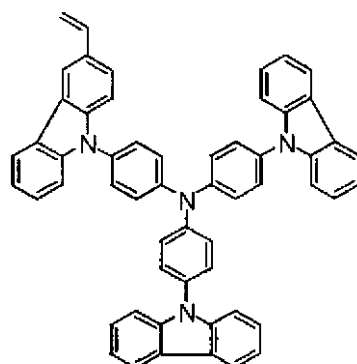
(E3)



(E4)



(E5)



(E6)

## 【 0 0 5 7 】

上記電子輸送性の重合性化合物としては、具体的には、下記一般式(E7)～(E15)

10

20

30

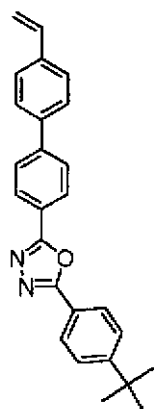
40

50

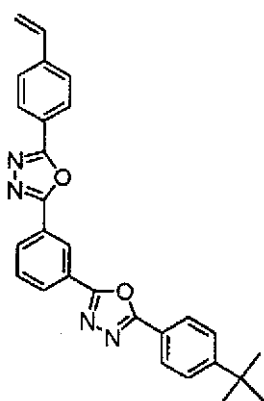
）で表される化合物が好ましく、共重合体におけるキャリア移動度が高いため、下記式（E 7）、（E 1 2）～（E 1 4）で表される化合物がより好ましい。

【 0 0 5 8 】

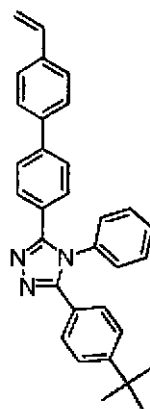
【 化 7 】



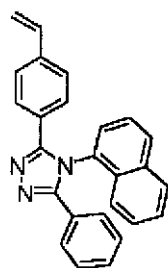
(E7)



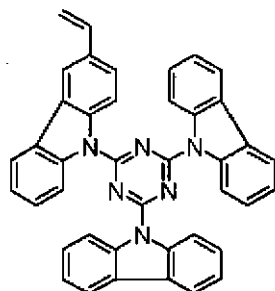
(E8)



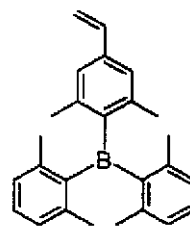
(E9)



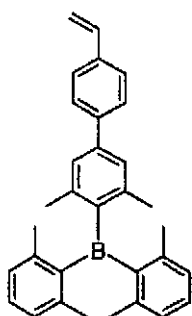
(E10)



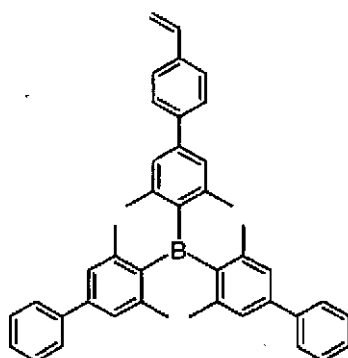
(E11)



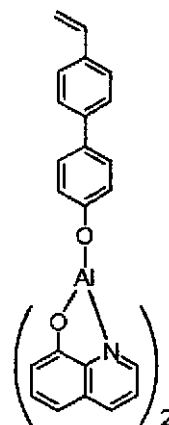
(E12)



(E13)



(E14)



(E15)

【 0 0 5 9 】

なお、上記式（E 1）～（E 1 5）において、上記式（A 1）で表される置換基を、上記一般式（A 2）～（A 1 2）で表される置換基に代えた化合物も好適に用いられるが、重合性化合物に官能基を容易に導入できるため、上記式（A 1）、（A 5）で表される置換基を有する化合物が特に好ましい。

【 0 0 6 0 】

10

20

30

40

50

これらのうちで、上記ホール輸送性の重合性化合物として、上記式 (E1) ~ (E3) のいずれかで表される化合物と、上記電子輸送性の重合性化合物として、上記式 (E7)、(E12) ~ (E14) のいずれかで表される化合物とを、上記イリジウム錯体と組み合わせ共重合させることがより好ましい。このような高分子発光材料は、高い発光効率および高い最高到達輝度を有し、耐久性にも優れる。この場合に、上記イリジウム錯体として、より長寿命化が図れるため上記式 (2)、(5) で表される錯体を用いることが特に好ましい。

#### 【0061】

上記式 (E1) ~ (E15) で表される重合性化合物は、公知の方法によって製造することができる。

10

なお、上記重合体は、さらに、他の重合性化合物から導かれる構造単位を有していてもよい。上記他の重合性化合物としては、例えば、アクリル酸メチル、メタクリル酸メチル等の(メタ)アクリル酸アルキルエステル、スチレンおよびその誘導体などのキャリア輸送性を有さない化合物が挙げられるが、何らこれらに制限されるものではない。

#### 【0062】

また、上記重合体の重量平均分子量は、1,000 ~ 2,000,000であることが好ましく、5,000 ~ 1,000,000であることがより好ましい。上記分子量がこの範囲にあると、重合体が有機溶媒に可溶であり、均一な薄膜を得られるため好ましい。

#### 【0063】

イリジウム錯体と、キャリア輸送性の重合性化合物(ホール輸送性および/または電子輸送性の重合性化合物)との比率を適宜設定すれば、所望の上記重合体を得られ、該重合体は、ランダム共重合体、ブロック共重合体、および交互共重合体のいずれでもよい。

20

#### 【0064】

上記重合体における、上記イリジウム錯体から導かれる構造単位数を  $m$  とし、キャリア輸送性化合物から導かれる構造単位数(ホール輸送性の重合性化合物および/または電子輸送性の重合性化合物から導かれる構造単位の総数)を  $n$  としたとき( $m$ 、 $n$  は1以上の整数を示す)、全構造単位数に対する上記イリジウム錯体から導かれる構造単位数の割合、すなわち  $m / (m + n)$  の値は、0.001 ~ 0.5の範囲にあることが好ましく、0.001 ~ 0.2の範囲にあることがより好ましい。 $m / (m + n)$  の値がこの範囲にあると、キャリア移動度が高く、濃度消光の影響が小さい、高い発光効率の有機EL素子を得られる。

30

#### 【0065】

また、上記重合体が、ホール輸送性化合物から導かれる構造単位と電子輸送性化合物から導かれる構造単位を含む場合、ホール輸送性化合物から導かれる構造単位数を  $x$ 、電子輸送性化合物から導かれる構造単位数を  $y$  とすると( $x$ 、 $y$  は1以上の整数を示す)、上記  $n$  との間に、 $n = x + y$  の関係が成り立つ。キャリア輸送性化合物から導かれる構造単位数に対する、ホール輸送性化合物から導かれる構造単位数の割合  $x / n$ 、および電子輸送性化合物から導かれる構造単位数の割合  $y / n$  の最適値は、各構造単位の電荷輸送能、イリジウム錯体から導かれる構造単位の電荷輸送性、濃度などによって決まる。この重合体を有機EL素子の発光層を形成する唯一の化合物として用いる場合、 $x / n$  および  $y / n$  の値は、それぞれ0.05 ~ 0.95の範囲にあることが好ましく、0.20 ~ 0.80の範囲にあることがより好ましい。なお、ここで、 $x / n + y / n = 1$  が成り立つ。

40

#### 【0066】

上記重合体の重合方法は、ラジカル重合、カチオン重合、アニオン重合、および付加重合のいずれでもよいが、ラジカル重合が好ましい。

#### 2. 有機エレクトロルミネッセンス素子

本発明に係る高分子発光材料は、有機EL素子の材料として好適に用いられる。上記有機EL素子は、陽極と陰極とに挟まれた1層または2層以上の有機高分子層を含み、該有機高分子層の少なくとも1層に、上記高分子発光材料が含まれる。本発明に係る高分子発光材料は、簡便な塗布法で発光層を成膜でき、素子の大面積化が図れる。

50

## 【0067】

本発明に係る有機EL素子の構成の一例を図1に示すが、本発明に係る有機EL素子の構成は、これに制限されない。図1では、透明基板(1)上に設けた陽極(2)および陰極(6)の間に、ホール輸送層(3)、発光層(4)および電子輸送層(5)を、この順で設けている。上記有機EL素子では、例えば、陽極(2)と陰極(6)の間に、1)ホール輸送層/発光層、2)発光層/電子輸送層のいずれかを設けてもよい。また、3)ホール輸送材料、発光材料、電子輸送材料を含む層、4)ホール輸送材料、発光材料を含む層、5)発光材料、電子輸送材料を含む層、6)発光材料の単独層のいずれかの層を1層のみ設けてもよい。さらに、発光層を2層以上積層してもよい。

## 【0068】

上記のような素子において、本発明に係る高分子発光材料が、上記イリジウム錯体から導かれる構造単位と、ホール輸送性の重合性化合物から導かれる構造単位と、電子輸送性の重合性化合物から導かれる構造単位とを含む重合体からなる場合は、該材料を含む上記有機高分子層は、ホール輸送性および電子輸送性を併せ持つ発光層として利用できる。このため、他の有機材料の層を設けない場合であっても、高い発光効率および耐久性を有する有機EL素子を作製できる。また、製造工程がさらに簡略化できる。

## 【0069】

上記の各層は、バインダとして高分子材料などを混合して、形成してもよい。上記高分子材料としては、例えば、ポリメチルメタクリレート、ポリカーボネート、ポリエステル、ポリスルホン、ポリフェニレンオキサイドなどが挙げられる。

## 【0070】

また、上記の各層に用いられる発光材料、ホール輸送材料および電子輸送材料は、それぞれ単独で各層を形成しても、機能の異なる材料を混合して、各層を形成していてもよい。本発明に係る有機EL素子における発光層においても、本発明に係る高分子発光材料の他に、キャリア輸送性を補う目的で、さらに他のホール輸送材料および/または電子輸送材料が含まれていてもよい。このような輸送材料としては、低分子化合物であっても、高分子化合物であってもよい。

## 【0071】

上記ホール輸送層を形成するホール輸送材料、または発光層と混合させるホール輸送材料としては、例えば、TPD(N, N'-ジメチル-N, N'-(3-メチルフェニル)-1, 1'-ビフェニル-4, 4'-ジアミン); NPD(4, 4'-ビス[N-(1-ナフチル)-N-フェニルアミノ]ビフェニル); m-MTDATA(4, 4', 4'-トリス(3-メチルフェニルフェニルアミノ)トリフェニルアミン)等の低分子トリフェニルアミン誘導体; ポリビニルカルバゾール; 上記トリフェニルアミン誘導体に重合性官能基を導入して重合した高分子化合物; ポリパラフェニレンビニレン、ポリジアルキルフルオレン等の蛍光発光性高分子化合物などが挙げられる。上記高分子化合物としては、例えば、特開平8-157575号公報に開示されているトリフェニルアミン骨格の高分子化合物などが挙げられる。上記ホール輸送材料は、1種単独でも、2種以上を混合して用いてもよく、異なるホール輸送材料を積層して用いてもよい。ホール輸送層の厚さは、ホール輸送層の導電率などに依存するが、通常、好ましくは1nm~5μm、より好ましくは5nm~1μm、特に好ましくは10nm~500nmであることが望ましい。

## 【0072】

上記電子輸送層を形成する電子輸送材料、または発光層と混合させる電子輸送材料としては、例えば、Alq3(アルミニウムトリスキノリノレート)等のキノリノール誘導体金属錯体、オキサジアゾール誘導体、トリアゾール誘導体、イミダゾール誘導体、トリアジン誘導体、トリアリールボラン誘導体等の低分子化合物; 上記の低分子化合物に重合性置換基を導入して重合した高分子化合物を挙げることができる。上記高分子化合物としては、例えば、特開平10-1665号公報に開示されているポリPBDなどが挙げられる。上記電子輸送材料は、1種単独でも、2種以上を混合して用いてもよく、異なる電子輸送材料を積層して用いてもよい。電子輸送層の厚さは、電子輸送層の導電率などに依存す

10

20

30

40

50

るが、通常、好ましくは  $1\text{ nm} \sim 5\text{ }\mu\text{m}$ 、より好ましくは  $5\text{ nm} \sim 1\text{ }\mu\text{m}$ 、特に好ましくは  $10\text{ nm} \sim 500\text{ nm}$ であることが望ましい。

【0073】

また、発光層の陰極側に隣接して、ホールが発光層を通過することを抑え、発光層内でホールと電子とを効率よく再結合させる目的で、ホール・ブロック層が設けられていてもよい。上記ホール・ブロック層の形成には、トリアゾール誘導体、オキサジアゾール誘導体、フェナントロリン誘導体などの公知の材料が用いられる。

【0074】

陽極とホール輸送層との間、または陽極と陽極に隣接して積層される有機層との間に、ホール注入において注入障壁を緩和するために、バッファ層が設けられていてもよい。上記バッファ層を形成するためには、銅フタロシアニン、ポリエチレンジオキシチオフエン (PEDOT) とポリスチレンスルホン酸 (PSS) との混合物などの公知の材料が用いられる。

10

【0075】

陰極と電子輸送層との間、または陰極と陰極に隣接して積層される有機層との間に、電子注入効率を向上するために、厚さ  $0.1 \sim 10\text{ nm}$  の絶縁層が設けられていてもよい。上記絶縁層を形成するためには、フッ化リチウム、フッ化マグネシウム、酸化マグネシウム、アルミナなどの公知の材料が用いられる。

【0076】

本発明に係る有機EL素子に用いる陽極材料としては、例えば、ITO (酸化インジウムスズ)、酸化錫、酸化亜鉛、ポリチオフエン、ポリピロール、ポリアニリン等の導電性高分子など、公知の透明導電材料が好適に用いられる。この透明導電材料によって形成された電極の表面抵抗は、 $1 \sim 50\text{ }\Omega/\square$  (オーム/スクエア) であることが好ましい。陽極の厚さは  $50 \sim 300\text{ nm}$  であることが好ましい。

20

【0077】

本発明に係る有機EL素子に用いる陰極材料としては、例えば、Li、Na、K、Cs等のアルカリ金属；Mg、Ca、Ba等のアルカリ土類金属；Al；MgAg合金；AlLi、AlCa等のAlとアルカリ金属との合金など、公知の陰極材料が好適に用いられる。陰極の厚さは、好ましくは  $10\text{ nm} \sim 1\text{ }\mu\text{m}$ 、より好ましくは  $50 \sim 500\text{ nm}$  であることが望ましい。アルカリ金属、アルカリ土類金属などの活性の高い金属を使用する場合には、陰極の厚さは、好ましくは  $0.1 \sim 100\text{ nm}$ 、より好ましくは  $0.5 \sim 50\text{ nm}$  であることが望ましい。また、この場合には、上記陰極金属を保護する目的で、この陰極上に、大気に対して安定な金属層が積層される。上記金属層を形成する金属として、例えば、Al、Ag、Au、Pt、Cu、Ni、Crなどが挙げられる。上記金属層の厚さは、好ましくは  $10\text{ nm} \sim 1\text{ }\mu\text{m}$ 、より好ましくは  $50 \sim 500\text{ nm}$  であることが望ましい。

30

【0078】

本発明に係る有機EL素子の基板としては、上記発光材料の発光波長に対して透明な絶縁性基板が好適に用いられ、具体的には、ガラスのほか、PET (ポリエチレンテレフタレート)、ポリカーボネート等の透明プラスチックなどが用いられる。

40

【0079】

上記のホール輸送層、発光層および電子輸送層の成膜方法としては、例えば、抵抗加熱蒸着法、電子ビーム蒸着法、スパッタリング法、インクジェット法、スピンコート法、印刷法、スプレー法、ディスペンサー法などを用いることができる。低分子化合物の場合は、抵抗加熱蒸着または電子ビーム蒸着が好適に用いられ、高分子材料の場合は、インクジェット法、スピンコート法、または印刷法が好適に用いられる。

【0080】

本発明に係る高分子発光材料を用いて発光層を成膜する場合は、インクジェット法、スピンコート法、ディップコート法または印刷法が好ましく用いられるため、製造工程が簡略化され、素子の大面積化も図れる。

50

## 【 0 0 8 1 】

また、上記陽極材料の成膜方法としては、例えば、電子ビーム蒸着法、スパッタリング法、化学反応法、コーティング法などが用いられ、上記陰極材料の成膜方法としては、例えば、抵抗加熱蒸着法、電子ビーム蒸着法、スパッタリング法、イオンプレーティング法などが用いられる。

## 【 0 0 8 2 】

## 3. 用途

本発明に係る有機EL素子は、公知の方法で、マトリックス方式またはセグメント方式による画素として画像表示装置に好適に用いられる。また、上記有機EL素子は、画素を形成せずに、面発光光源としても好適に用いられる。

10

## 【 0 0 8 3 】

本発明に係る有機EL素子は、具体的には、ディスプレイ、バックライト、電子写真、照明光源、記録光源、露光光源、読み取り光源、標識、看板、インテリア、光通信などに好適に用いられる。

以下、実施例に基づいて本発明をさらに具体的に説明するが、本発明はこれらの実施例に限定されるものではない。

## 【 0 0 8 4 】

## [ 実施例 ]

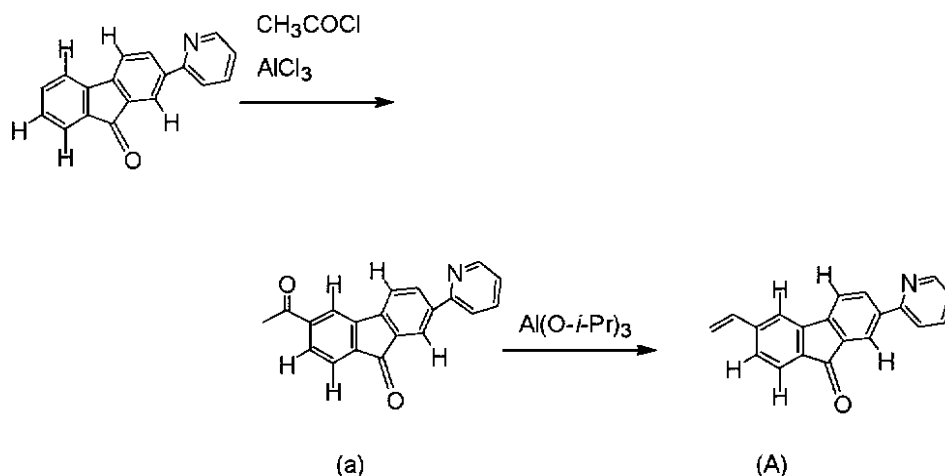
## [ 合成例 1 ]

( 1 - 1 ) 配位子 ( A ) の合成  
スキーム 1

20

## 【 0 0 8 5 】

## 【 化 8 】



30

## 【 0 0 8 6 】

2 - ( 2' - ピリジル ) - 9 - フルオレノン ( 特開 2 0 0 5 - 0 2 3 0 7 2 号公報に記載された方法により合成した。 ) 1 . 5 4 g ( 6 . 0 m m o l ) をクロロホルム 9 0 m L に溶解した。この溶液に、塩化アルミニウム 1 . 0 g ( 7 . 5 m m o l ) のニトロメタン溶液 5 m L を加え、室温で 5 分間攪拌した。得られた反応液に塩化アセチル 0 . 5 9 g ( 7 . 5 m m o l ) を滴下し、室温で 1 2 時間攪拌した。反応液を水で洗浄後、溶媒を留去し、シリカゲルカラムクロマトグラフィーで精製して、化合物 ( a ) を得た。

40

## 【 0 0 8 7 】

次いで、化合物 ( a ) 0 . 9 6 g ( 3 . 2 m m o l ) 、アルミニウムトリイソプロポキシド 0 . 6 6 g ( 3 . 2 m m o l ) およびキシレン 2 0 m L の混合物を 1 . 5 時間加熱還流した。得られた反応液を水で洗浄後、溶媒を留去し、シリカゲルカラムクロマトグラフィーで精製して、配位子 ( A ) 0 . 5 7 g ( 2 . 2 m m o l ) を得た ( スキーム 1 ) 。

## 【 0 0 8 8 】

50

配位子 (A) の同定データは以下の通りである。

元素分析： 計算値 ( $C_{20}H_{13}NO$ ) C 88.56 ; H 4.80 ; N 5.90

実測値 C 88.81 ; H 4.78 ; N 5.92

質量分析 (EI) : ( $M^+$ ) 271

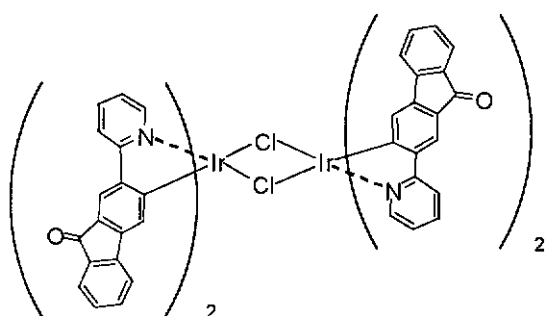
【0089】

(1-2) イリジウム錯体 (B) の合成

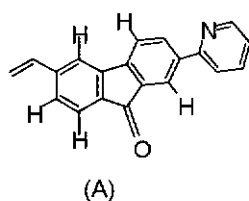
スキーム 2

【0090】

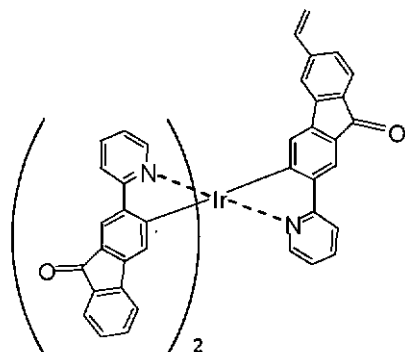
【化9】



(c)



(A)



(B)

【0091】

上記スキーム 2 のように合成した。化合物 (c) (特開 2005-023072 号公報に記載された方法により合成した。) 0.76 g (0.51 mmol) と配位子 (A) 0.27 g (1.0 mmol) との混合物にグリセリン 10 mL を加え、170 で 48 時間加熱撹拌した。反応液を室温にまで冷却した後、100 mL の水を加え、沈殿を濾取、乾燥した。得られた粗成生物をシリカゲルカラムクロマトグラフィーで精製し、イリジウム錯体 (B) を得た。

【0092】

イリジウム錯体 (B) の同定データは以下の通りである。

元素分析： 計算値 ( $C_{56}H_{35}IrN_3O_3$ ) C 67.95 ; H 3.54 ; N 4.25

実測値 C 67.98 ; H 3.48 ; N 4.32



質量分析 (FAB+) : 989 ( $M^+$ )

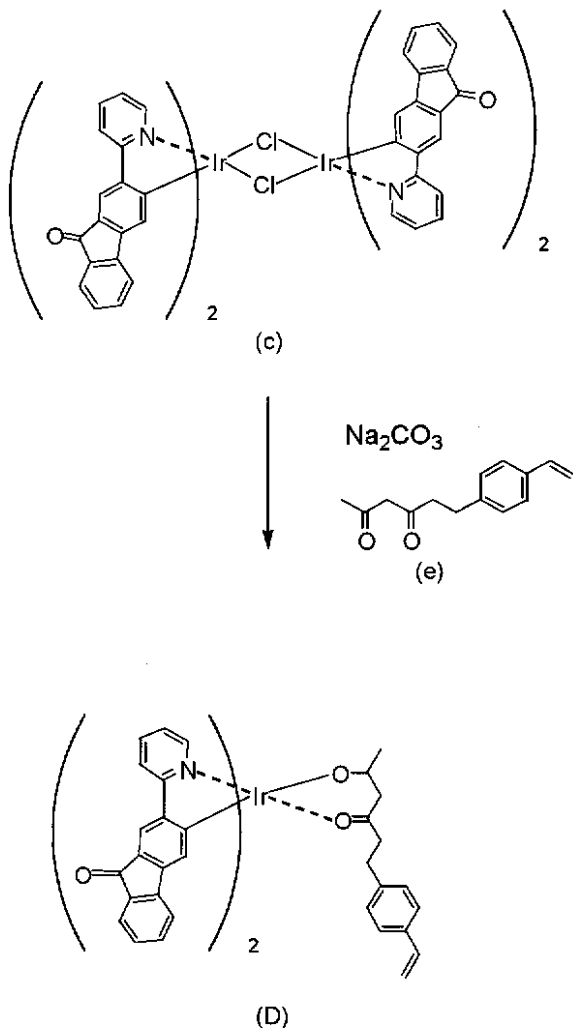
【0093】

[合成例2] イリジウム錯体(D)の合成

スキーム3

【0094】

【化10】



10

20

30

40

【0095】

上記スキーム3のように合成した。化合物(c) 0.47 g (0.32 mmol)、化合物(e) (特開2003-113246号公報に記載の方法に従って合成した。) 0.30 g (1.4 mmol) および炭酸ナトリウム 0.15 g (1.4 mmol) の混合物に2-エトキシエタノールを加え、15時間加熱還流した。反応混合物を室温にまで冷却した後、沈殿を濾取し、水、エタノールおよびジエチルエーテルで順に洗浄した。得られた粗生成物をシリカゲルカラムクロマトグラフィーで精製し、イリジウム錯体(D)を得た。

【0096】

イリジウム錯体(D)の同定データは以下の通りである。

元素分析: 計算値 ( $\text{C}_{50}\text{H}_{37}\text{IrN}_2\text{O}_4$ ) C 65.15; H 4.02; N 3.04

実測値 C 65.31; H 4.23; N 3.12

質量分析 (FAB+) : 921 ( $M^+$ )

【0097】

[実施例1] 共重合体(I)の合成

50

密閉容器に、イリジウム錯体 (B) 80 mg、上記式 (E1) で表される化合物 (特開 2005-97589 号公報に記載の方法に従って合成した) 460 mg、および上記式 (E7) で表される化合物 (特開平 10-1665 号公報に記載の方法に従って合成した) 460 mg を入れ、脱水トルエン (9.9 mL) を加えた。次いで、V-601 (和光純薬工業 (株) 製) のトルエン溶液 (0.1 M、198  $\mu$ L) を加え、凍結脱気操作を 5 回繰り返した。真空のまま密閉し、60 で 60 時間攪拌した。反応後、反応液をアセトン 500 mL 中に滴下し、沈殿を得た。さらにトルエン-アセトンでの再沈殿精製を 2 回繰り返した後、50 で一晚真空乾燥して、共重合体 (I) を得た。

#### 【0098】

共重合体 (I) の重量平均分子量 ( $M_w$ ) は 73200、分子量分布指数 ( $M_w / M_n$ ) は 1.83 であった。ICP 元素分析および  $^{13}\text{C}$ -NMR 測定の結果から見積もった共重合体における  $m / (m + n)$  の値は 0.029 であった。また、共重合体 (I) において、 $x / n$  の値は、0.42 であり、 $y / n$  の値は、0.58 であった。

10

#### 【0099】

##### [ 実施例 2 ] 共重合体 (II) の合成

イリジウム錯体 (B) の代わりにイリジウム錯体 (D) を、上記式 (E1) で表される化合物の代わりに上記式 (E2) で表される化合物 (特開 2005-200638 号公報に記載の方法に従って合成した) を、上記式 (E7) で表される化合物の代わりに上記式 (E14) で表される化合物 (特開 2005-200638 号公報に記載の方法に従って合成した) を用いた他は、実施例 1 と同様にして、共重合体 (II) を得た。

20

#### 【0100】

共重合体 (II) の重量平均分子量 ( $M_w$ ) は 66500、分子量分布指数 ( $M_w / M_n$ ) は 1.91 であった。ICP 元素分析および  $^{13}\text{C}$ -NMR 測定の結果から見積もった共重合体における  $m / (m + n)$  の値は 0.030 であった。また、共重合体 (II) において、 $x / n$  の値は、0.41 であり、 $y / n$  の値は、0.59 であった。

#### 【0101】

##### [ 実施例 3 ] 有機 EL 素子の作製および発光特性の評価

ITO 付き基板 (ニッポ電機 (株) 製) を用いた。これは、25 mm 角のガラス基板の一方の面に、幅 4 mm の ITO (酸化インジウム錫) 電極 (陽極) が、ストライプ状に 2 本形成された基板であった。

30

#### 【0102】

まず、上記 ITO 付き基板上に、ポリ (3,4-エチレンジオキシチオフェン)・ポリスチレンスルホン酸 (バイエル (株) 製、商品名「バイトロンプ」) を、回転数 3500 rpm、塗布時間 40 秒の条件で、スピンコート法により塗布した。その後、真空乾燥器で減圧下、60 で 2 時間乾燥し、陽極バッファ層を形成した。得られた陽極バッファ層の膜厚は、約 50 nm であった。次に、共重合体 (I) 90 mg をトルエン (和光純薬工業 (株) 製、特級) 2910 mg に溶解し、この溶液を孔径 0.2  $\mu$ m のフィルターでろ過し、塗布溶液を調製した。次いで、上記陽極バッファ層上に、上記塗布溶液を、回転数 3000 rpm、塗布時間 30 秒の条件で、スピンコート法により塗布した。塗布後、室温 (25 ) で 30 分間乾燥し、発光層を形成した。得られた発光層の膜厚は、約 100 nm であった。

40

#### 【0103】

次に、発光層を形成した基板を蒸着装置内に載置した。次いで、カルシウムおよびアルミニウムを重量比 1 : 10 で共蒸着し、陽極の延在方向に対して直交するように、幅 3 mm の陰極をストライプ状に 2 本形成した。得られた陰極の膜厚は、約 50 nm であった。

#### 【0104】

最後に、アルゴン雰囲気中で、陽極と陰極とにリード線 (配線) を取り付けて、縦 4 mm × 横 3 mm の有機 EL 素子を 4 個作製した。上記有機 EL 素子に、プログラブル直流電圧 / 電流源 (TR6143、(株) アドバンテスト社製) を用いて電圧を印加して発光させた。その発光輝度を、輝度計 (BM-8、(株) トプコン社製) を用いて測定した。

50

## 【 0 1 0 5 】

作製した有機 E L 素子は、青色の発光を示した。

青色光は、C I E 色度座標において  $x = 0.16$  および  $y = 0.21$  であった。最大発光外部量子効率  $5.2\%$ 、最高輝度は  $4800 \text{ cd/m}^2$  であった。また初期輝度  $100 \text{ cd/m}^2$  で電流値を一定にして通電して連続発光し、強制劣化させた際、輝度が半減するまで、 $3000$  時間であった。

## 【 0 1 0 6 】

[ 実施例 4 ] 有機 E L 素子の作製および発光特性の評価

共重合体 ( I ) の代わりに共重合体 ( I I ) を用いたほかは、実施例 3 と同様にして、有機 E L 素子を作製し、発光色などの測定を行った。

10

## 【 0 1 0 7 】

作製した有機 E L 素子は、青色の発光を示した。得られた青色光は、C I E 色度座標において  $x = 0.15$  および  $y = 0.23$  であった。最大発光外部量子効率は  $4.8\%$ 、最高輝度は  $3800 \text{ cd/m}^2$  であった。また初期輝度  $100 \text{ cd/m}^2$  で電流値を一定にして通電して連続発光し、強制劣化させた際、輝度が半減するまで、 $2800$  時間であった。

## 【 図面の簡単な説明 】

## 【 0 1 0 8 】

【 図 1 】 図 1 は、本発明に係る有機 E L 素子の例の断面図である。

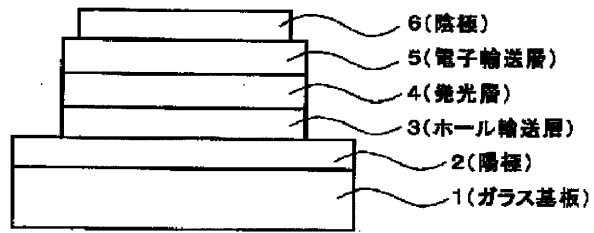
## 【 符号の説明 】

20

## 【 0 1 0 9 】

- 1 : ガラス基板
- 2 : 陽極
- 3 : ホール輸送層
- 4 : 発光層
- 5 : 電子輸送層
- 6 : 陰極

【図 1】



---

フロントページの続き

(72)発明者 高橋 良明

千葉県千葉市緑区大野台 1 - 1 - 1 昭和電工株式会社研究開発センター内

F ターム(参考) 3K007 AB03 AB04 AB11 AB18 DB03 FA01

4J100 AB00P AB07Q AB07R BA31Q BC43Q BC43R BC65Q BC69P BC73R BC79R

BD04P CA01 CA04 CA05 DA61 JA32

【要約の続き】

【選択図】なし

